

座談会

出席者

(写真右より)

三木万寿
 篠原川
 行義
 男忠
 二明
 澄井
 門左久原
 靖本
 原会



北海道の特殊事情と制作を語る

原 今日には北海道の特殊事情、つまり本州と違う気候、風土。あるいは中央から遠距離にあるという地理的条件。それらのものが制作に及ぼす影響とか、特殊な事情を克服するにはどうしたらよいか。などについていろいろお話いただきしたいと思います。

小川原 北海道の特色というよりも、風土性があるのか、ないのか。もしあるとすれば、それはどんな型で現われているかが、まず問題じゃないかね。

原 そうですね。それでは風土性の問題を取りあげるとして、はつきりした型で風土性というものが北海道ではありますか。

柄内 絵の中に風土性が現われてくるのか、それとも住んでいる、という事実が先なのかという問題だね。日本という一つの小さな列島の中のクリマとして北海道が認識されるものなのか…。

小川原 僕は北海道独特の風土性はあると思う。ぼくらが背負ってきた歴史が本州と違う。風土性とはいわゆる気候風土そのものではなく、れんめんとして続いてきた人間生活の累積だ。

国井 札幌は表面的にはそれが薄いけど、北のはずれの荒漠とした地方へ行くと、本当に北海道だという感じがするね。

原 作品の上に、そうした風土性が現われ感じられるだろうか…。

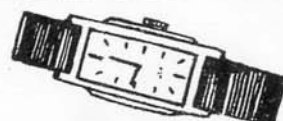
本田 具体的にどんな型というところむずかしいね。

小川原 解答になるかどうかかわからないが、「荒々しさ」「重さ」「広さ」などに象徴できるのでないか。本道と歴史のちがう地方の作家と比べると違いが出てくると思う。具体的にいうと、色が少ないとか、暗いとか、——これは「重々しさ」となつて現われる。

本田 「泥くさい」とか…。

一木 それもあるね。

折原 作品の上に具体的に北海道のなものがあるかどうかい



国鉄物資部 指定店
 北信販

矢口貴金属眼鏡店

さっぽろ狸小路1丁目
 TEL (4) 8526



各種装身具修理



うことは別として、北海道的自然風土はあるが、個々の作家が北海道の風土性を認識しているかどうかということになる。これはなかなかむずかしいことですね。

栃内 北海道には歴史がない。伝統がない。「北海道の絵」を簡単に見分けることはできない。とくに若い人は新しいものをドンドン採り入れるし……。

小川原 新しいものに対する対応の仕方、それは作家個人の問題だ。風土性の問題とはちがう。

本田 そう。新しいものと古いものと、そんなものとの関係のない、それ以前のものが風土性であり、風土性はあるとすれば、どんな新しいといわれる仕事の中にもあるもんだと思うな。

栃内 作家として、自分をつかもうとすると、その底には無意識的に「オレは北海道の人間だ」という構えがあるんだ。

国井 たとえば雪ひとつ描いても、東京の人がかいたものと、北海道の人がかいたものでは違うね。

本田 それは雪に対するかまえ方のちがいだね。雪は「きれいなもの」と見る東京の人と、半年雪の中に「閉じこめられている」と感ずるわれわれとでは当然雪に対する身構え方がちがってくるわけだ。

原 風土性の問題はまた議論の余地がたくさんありますがここで結論を導き出すのはむずかしいと思います。別の機会に大いに語っていただくことにして……。

つきにもつと身近な問題。たとえば制作していて感ずる「北海道の特殊性」についてお話しただきたい。

一本 まずいえることは北海道の冬は寒いということですね。しかし寒くて困るといっても、本当は北海道の方が楽だね(笑)——東京では、



北海道みたいに上衣をぬいで仕事をするわけにはいかない。もつとも、いまは暖房設備もかわつたがね……。

折原 も一ついえることは東京から遠いということですね。そしてそれが今まではハンディキャップだったが、交通も便利になり、東京へ札幌を三時間と、地理的な距離感はずっと短縮されましたね。お金はかかることですが……。

一本 そう単純にはいえないと思うが、東京で暮らしていても、北海道に住んでいるわれわれより上野やその他の展覧会を見ない作家もたくさんいますからね……(笑)。

原 なんだか北海道の特殊事情は、よい条件みたくありません。金もないからちよい飛行機で飛ぶわけにもゆかないし、となると中央のことは雑誌を手がかりにするというのが実情じやないですかね。

遠藤 北海道にいと、自然に即しすぎて、この広大な自然に負けてしまふ——ということもあるね。

原 それではここで具体的に制作上困るといような話を——。

大本 版画のことでは、材料や道具が入手困難だということですね。学生の使う道具では本当の仕事ができません。それに冬など、紙が乾燥して刷りにくい。版画のいい作品に接する機会が少ない。やはり悪い条件が多いです。

本田 彫刻の方でも似たようなことがいえます。最近大丸で道具類は大分揃うようになりましたが、粘土をどこでどんなものを買つてよいかかわからないし、石膏もどこで買うのかわからない。それに冬の寒さでは粘土が凍るしね。だから彫刻をやる人が少ないんだ。しかし木材は豊富だし、木を削るといふ楽しみは格別だ。もつと木彫をやる人が増えるべきだ。残念ながら伝統がないですね——。

折原 工芸の場合も材料を選ぶということが一番困難だ。それに本来なら分業でするものも、全部自分でやらねばならない。



美しいお洒落



東京 銀座

三愛

札幌店

2階



ればできない仕事ですからね。

国井 版画・彫刻工芸はやはり北海道の特殊事情にずいぶん大きく支配されるわけですね。だからやる人も少ない——。

一木 それに指導者も少ない——！

道具や材料の使い方から教わらな

原 本道は中央依存だ、といわれるが、この点について——。

本田 政治文化の機構が中央集権的で、北海道に住んでいても中央に無関係ではられない。だから「中央依存」ということは、中央集権という政治、文化のしくみを前提に考えねばならない。

栃内 大いに「依存」し、中央の展覧会に出したり、いい展覧会をもつてきたりして、いいものを見て吸収すべきだ。

遠藤 北海道のこの雄大な自然から受ける感動より、すぐれた作品から刺激を受けることの方が多い。美術雑誌だけみていても、表面的なものだ。せめて札幌に近代美術館を作つてほしいものだ。

一木 美術館があつて、見たい時に見られるのが一番いい。

遠藤 いつも良いものを見てみると、特定の人に影響されるといことが少なくなる。

栃内 全道展は中央の人——も

ちろん本道関係者だが——道内の人も参加しているので、道内の人にとつては、よい刺激になると思う。

小川原 われわれが「中央」とい

う東京の絵に接するのは賛成だが、単に接するというだけではなく、拒絶の仕方があると思うんだ。そこにハッキリしたものを持たなければ、いくら中央のものに接しても意味はない。

本田 対決のしかた、抵抗のしかたということですね。

一木 それは大切なことだね。制作をしている時は展覧会を見



ではないか。もちろん札幌としてだがね。

にゆかないという人もいる。
原 それでは北海道は本当に発表の場が少ないだろうか。個展、公募展あらゆる意味で——。

本田 個展として見るとむしろ発表の場はわれわれは恵まれているの

大本 札幌以外のところは少し事情がちがうだろうが——

本田 しかし大きな展覧会を開くとか、中央からいろいろなる展覧会をもつてくるという場合、やはり会場が問題になる。

一木 それに個人の所有でいい作品が道内にたくさんあるのだが、それを見る機会がない。そういう場所がほしい。美術館がほしい。札幌は人口六十万。百万都市を目差しているというが、美術館もそろそろ考えてほしいな。

本田 札幌より小さい都市でも美術館をもつているところはいくつもある。

栃内 公募展を開くにしても、いつもデパートを借りなければならぬというのはいさげない。

国井 外国の人が旅行する場合、その行先で、まず見るのは美術館だというのが、それをいわれると全く恥かしい。

折原 美術館建設運動は具体的にどうなつていんですか。

本田 実際にはほとんど何もしてないといえるでしょうね。絵かきだけが美術館、美術館とさかいでもなかなかできない。道民、市民多数の要望が必要だね。

栃内 札幌だと道内から見に来や



すい。修学旅行もほとんど札幌に集まる。札幌に来て北大や時計台、テレビ塔など見るところはいくらもない。美術館があつたらすばらしい。

国井 最後はやはり道や市が直接やつてくれるんだろうね。

営業品目

パッチ・カップ・楯
徽章類一式・ネームプレート
各種鑑札類・花瓶・灰皿

専門製作



弊社は道内最古の歴史と、洗練されたる技術とをもちまして、道内唯一の専門店として技術の練磨に精進致して居ります。何卒多少にかかわらず御下命の程をお願い申し上げます。

札幌市南4条西3丁目 ススキノ停留所前
株式会社 札幌メタル商会

電話 ④0374 ⑤8711 ③1209番

柄内 京都市民美術館に行つたとき、若い人たちが全館を使つて百餘くらいの作品をズラリとならべて、一年間かかつて描いたものを全部一堂に並べていたが、うらやましかつた。これは作家にとつて大変勉強になる。

小川原 やはりどうしても美術館がほしいね。しかしどんな美術館だい。

本田 まず公募展など開ける大きなギャラリー。

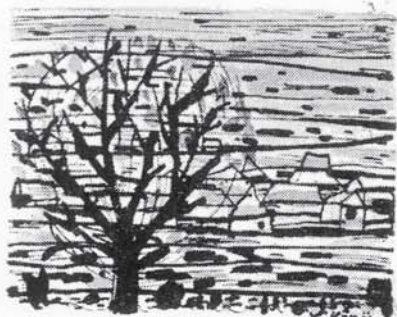
一本 常設の会場、道内の個人所有の名作をかりてくるとか、道内係作家の代表作を常時展示しておくというような。

大本 研究会・講習会など開けるスタジオもほしい。

本田 それらも含めた美術ライブラリーも——

折原 欲ばりましたね——(笑)

原 結論がでたようです。われわれも美術館を作ることに大いに努力しましょう。ではこのへんで。



第16回全道展

6月6日—11日
札幌 8階

授賞式懇親会

6月11日午後3時
6階 食堂別室

地方展

室蘭	7月1日—3日
函館	7月25日—30日
旭川	未定
小樽	未定

バッチ
カップ・楯
カッパ・楯
旗・幕・幟
組 合 旗
萬 国 旗
国 旗

各種製造販売

元発総揚旗国式禮山



株式
会社

山

禮

札幌市南一条西七丁目十二
電話 ④3011④3012③6741
受信略号 「サッポロ」ヤマレイ
振替口座 小樽 2909番

専務取締役 山本禮作